

氏名(国籍)	李 志 炯 (韓 国)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博 甲 第 3023 号
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	島崎藤村と大正期の文化潮流
主査	筑波大学教授 名波 弘 彰
副査	筑波大学教授 博士(文学) 荒木 正 純
副査	筑波大学教授 博士(文学) 阿部 軍 治
副査	筑波大学教授 新保 邦 寛
副査	筑波大学助教授 博士(文学) 宮本 陽一郎

論文の内容の要旨

本論文は、自伝的色彩の強い作風で知られている島崎藤村の大正期の文学作品および雑誌『処女地』と大正期の文化潮流との関わりの諸相を明らかにしようとしたものである。

このような観点から、従来私小説作家、自然主義作家と目され、同時代の社会状況とは無縁な作家と思われがちであった藤村や彼の作品のうち、大正期の作品に関していえば、実際には決してそうでなかったことを究明することで、時代状況の変化という力道的な枠組みの中で文化と文学とが相互に交流した一つのプロトタイプを提示することに本論文の目的がある。

【本論文の構成】

序章

第Ⅰ部 婦人・母性と藤村文学

第一章 『桜の実の熟する時』における〈母性〉のありよう

第二章 島崎藤村の童話における〈母性性〉

第三章 もうひとつの告白－『新生』における〈母性〉〈人間改造〉の意識をめぐって－

第四章 婦人文芸雑誌『処女地』と島崎藤村

第Ⅱ部 関東大震災後の社会・文化と藤村文学

第五章 関東大震災と〈震災小説〉－大震災後の報道環境と島崎藤村『子に送る手紙』－

第六章 島崎藤村『子に送る手紙』における〈内〉と〈外〉

第七章 異質な二つの語りと子供の〈独立〉の内実－『嵐』論－

第八章 円本ブームと島崎藤村『分配』

結章

本論文は二部構成となっている。第Ⅰ部「婦人・母性と藤村文学」では、関東大震災以前の藤村文学について、第Ⅱ部の「関東大震災後の社会・文化と藤村文学」では、関東大震災以後の作品について、特に『子に送る手紙』『嵐』『分配』を中心に考察している。

まず第Ⅰ部の第一章では、『桜の実の熟する時』と同時代の女性教育・信仰など女性をめぐる言説との交渉の様

相を探り、＜母性＞＜霊肉の葛藤＞という一見きわめて内面化した主題が実は同時代の社会性と政治性に結びつくことを解明している。

第二章では、藤村童話の表現形式が「母性保護論争」を中心とした大正中期の女性をめぐる文化的コンテクストの変容と結びつくことを考察している。具体的には、＜女権＞主張から＜母性擁護＞主張へと移行した女性運動の路線の変化が、藤村童話における父親が子に話し聞かせるという＜母親代行＞の表現形式に深く浸透していることを明らかにしている。そしてその背景には母親不在という藤村家の実生活上の事情があることが指摘されている。

第三章では、藤村が姪こま子との背徳関係を自ら告白したことで話題となった『新生』を考察している。同時代の女性運動の二つの目的であった＜女権＞と＜母性＞の論理が、女性主人公の独立と男性主人公の＜母性代行＞という小説ストーリーの中心軸をそれぞれ支えていることを明らかにしている。さらには『新生』の発表が、女性の告白による人間改造という社会的現象の流行を押し進める上で、一定の役割を果たしたことを実証することで、『新生』というテキストと同時代の文化的コンテクストとが双方向的関係にあることを明らかにしている。

第四章では、藤村主宰の婦人文芸雑誌『処女地』を分析することで、大正期の婦人運動および婦人雑誌の中の『処女地』の位置づけを試みている。これまで「現実無視の女性雑誌」として批判されてきた『処女地』が、女性読者の投稿による告白記事を通して内面を省察させ、女性の自立を促したことを明らかにし、『処女地』評価の新たな可能性を提示している。

第Ⅱ部に入って第五章では、時代が以前とは打って変わって保守化の傾向を強めていった関東大震災以後の社会情勢と＜震災小説＞に注目し、震災直後、新聞に連載された藤村の『子に送る手紙』を通して社会に対する藤村の批判精神が分析されている。具体的には、言論統制の厳しい状況の最中、朝鮮人虐殺事件など震災のもたらした不幸な出来事をあえて書き記したことの中に批判精神が捉えられると主張している。

第六章では、第五章で扱った『子に送る手紙』が新聞に連載された後、小説の後編となる箇所の雑誌発表を経て、新たなテキストへと再構築されてゆく過程を考察している。震災をルポルタージュ風に語った前編とは異なって、父と子で構成される家族の存在が前景化される後篇の分析によって、この小説が新聞に連載された『子に送る手紙』とは質の違った新たなテキストへと変容したことが考察されている。

第七章では、同時期の作品の中では最も評価が高かった『嵐』の分析を試みている。ここでは小説を紡ぎ出している二つの異質な語り、すなわち父としての語り、夫としての語りを浮かび上がらせ、『嵐』に描き出された＜父性＞の顕在化と成長した子供の独立の意味が追求されている。

第八章では、大正末から昭和初期にかけて起こった出版革命ともいえるべき「円本ブーム」を文化的・経済的現象の側面から捉え、小説『分配』との関連性を分析している。藤村自身、円本の恩恵を受けた一人でもあったが、この小説は、巨額の印税収入を子供たち四人に分配する経緯を円本ブーム・金融恐慌などの文化的、経済的コンテクストを視野に入れつつ、解明している。さらには社会・文化に向ける藤村の傍観者のまなざしが実は彼の批判精神を支えていたのであり、そのまなざしが深化すればするほど、彼の文学の中では＜父性＞の意味を問うことに向かったと解釈され、そうした内省化した父性を通じた自分の父親青山半蔵の存在があらためて捉え返され、近代の黎明期の人間像を描いた『夜明け前』の誕生がありえたことが示唆されている。

以上の考察から本論文は、これまで一概に＜自伝的＞＜自己告白的＞文学として規定されてきた藤村文学研究における既存の評価軸は再考されるべきであると主張するに至っている。とりわけ、過渡期文学として評価されてきた大正期藤村文学こそ、同時代の文化と文学との交渉が最も如実に投影された領域であり、それゆえに藤村の大正期の文学作品は、一元的な評価軸に収斂されない、さまざまな亀裂をはらんだ多面的な葛藤体として、新たな読解の可能性が提示できる領分であると結論づけている。

審査の結果の要旨

藤村文学は、明治期と昭和期の作品が主題と構想において自己完結的な結実として高く評価されているのに対して、その間の大正期の作品は、それ自体の固有の世界をもつというよりも、同時代の政治的・社会的・文化的コンテクストを媒介にしなければ、その主題性が明確化しない低調な作品と評価されてきた。本論文は、そのような大正期の作品の低調性を文化論的文学研究という新しい理論を適用すれば、どのような評価が可能なのかを追求したものである。したがってその方法論は、あえて文学テキストを同時代の政治、社会、文化のコンテクストに開くこと、換言すれば、文化コンテクストがいかに文学テキストに織り込まれているのか、といったテキストとコンテクストの関係性を分析するものである。

とりわけ、第Ⅰ部の第二章は、作品の同時代に社会的に盛り上がった「新しき女」をめざす女性運動が女権の確立から母権保護へと論争の視点を微妙に移動させてゆく推移を史料の分析を通して確認し、その微妙な移動を藤村が鋭く見抜き、それを自己の文学テキストの主題に織り込んでいったことを明らかにしている。文学テキストと社会コンテクストの両者にまたがる本章の解釈は、本論文の構想および理論的背景が十分に有効であることを証明する好論となっている。

このような全体の構想・理論にかかわるテキスト分析の鋭さは、第二部の第六章の『子に送る手紙』の考察にも生かされている。すなわち、藤村が新聞に連載したルポルタージュ風の震災記事が新たな社会状況に関する内容を加えて文学テキストへと再構築されてゆく過程が精密に分析されているが、その分析を通して震災による社会の激しい変貌をまのあたりにして、社会への批判精神を獲得してゆく藤村自身の変貌が捉えられている。また第七章の『分配』のテキスト分析も、従来の研究が見落としていた同時代の銀行制度、社会主義思潮の浸透による財産に対する考え方の変貌というコンテクストに着目し、それを主題とかがわらせて論じているが、その考察もまた本論文が採用した理論の有効性を実証している。

以上の構想と理論にもとづく文学テキストの分析を概観するとき、本論文は大正期の藤村文学研究に新たな理論的考察を加えることで豊かな成果を得ているのだが、その意味で、著者が結論づけるごとく、藤村の大正期のテキストは「新たな読解の可能性」を秘めているという指摘が納得させられる。その成果は今後の藤村文学研究に貢献しうるものと評価される。その背景には明治期の藤村文学から昭和期の藤村晩年の大作『夜明け前』に至るまでに、社会的・文化的コンテクストと鋭く交渉した大正期の文学テキストがあり、本論文がそのテキストを考察の素材にしたことが大きくあずかっていよう。その点でも、著者の洞察力の確かさが認められる。

ただ惜まれるのは、第Ⅰ部の始めの第一章と終わりの第四章のテキスト分析に力不足が感じられるために、第Ⅰ部全体の構想の輪郭がややぼやけてしまい、第Ⅱ部へとつなぐ構想の展開が曖昧となっていることである。そのため、本論文が取り上げた同時代の社会的・文化的コンテクストが、さまざまな同時代言説の中から文学テキストに合わせて偶然に選ばれたという印象を与えてしまう危惧が生じてしまっている。著者の今後一層の研鑽が望まれるところである。

以上、総括していえば、新しい文学理論の実践を通して大正期藤村文学研究を推し進めた本論文は、学界に十分寄与する成果を成し遂げたと評価できる。したがってその成果は、本論文に見受けられる一部の考察の物足りなさを覆って余りあるものと判断される。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。